

加賀検定

第9回 加賀ふるさと検定試験問題

上級 (全60問)

解答・解説付

2021年12月19日

加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会

各問題に対して、それぞれ①～④までの選択肢の中に正解が1つあります。解答用紙に、正解と考える番号を1つだけ○で囲って下さい。(黒色のエンピツもしくはボールペンを使用のこと)

1 加賀市の地形を見ると、低地の北側は日本海に面し、江沼砂丘とよばれ、()の時代に堆積した砂層が現在の片野から塩屋近辺まで見られる。

- ①新第三紀 ②古第三紀 ③第四紀完新世 ④第四紀更新世

加賀市の地形を見ると、低地の北側は日本海に面し、江沼砂丘と呼ばれています。この一帯は、第四紀完新世の時代に堆積した砂層が主体となった土壌が現在の片野から塩屋近辺まで見られます。

2 当市の測量地点である加賀菅谷における、ここ30年間の平均降水量は、約()mmとなっている。

- ①2,862 ②3,078 ③4,162 ④5,268

加賀市の気候は、日本海側気候の北陸型で、晩秋から冬にかけての曇天と多雪に特徴があります。また、冬は季節風が強く、海岸の植生に大きな影響を与えています。気温や降水量では、測量地点である「加賀菅谷」のここ30年間の平均気温は、およそ13.1度、年間降水量は3078.6mmとなっています。

3 当市の「女郎ヶ滝」は、九谷町近くを流れる()の枝沢にかかる、落差およそ40mの滝である。

- ①千束川 ②杉の水川 ③生水川 ④九谷川

九谷町から大日山登山口に向かって進むと、大聖寺川の支流となる千束川があります。この千束川をさらに上流に向かって進むと、千束ヶ滝が、さらに20分ほど登った上流の枝沢には、巨大な一枚岩を優雅に滑り落ちている女郎ヶ滝があります。

4 日本で最も古い飛騨変成岩の地層が加賀市では、()地区に見られる。

- ①片野 ②三谷 ③九谷 ④大土

日本で見られる一番古い飛騨変成岩の地層が九谷地区に局部的に見られるほか、上流から下流にかけてさまざまな地層を観察することができます。上流から飛騨変成岩類をはじめとして、例えば錦城山砂岩層・尼御前凝灰質互層・加佐ノ岬砂岩層などが分布し、その中には貝や植物、カニなどの化石を含むものもあります。

5 平成5年(1993)片野鴨池はラムサール条約に基づく登録湿地になった。この条約は()のラムサールという都市で開催された会議で採択された条約に基づいている。

- ①サウジアラビア ②オマーン ③イラン ④イラク

ラムサール条約とは昭和46年(1971)イランのラムサールという都市で開催された国際会議で採択された、湿地に関する条約です。正式名称は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といいますが、採択の地にちなみ、一般に「ラムサール条約」と呼ばれています。

6 加賀市河南町の地層からはピカリアと称する()の化石が見ついている。

- ①ホタテ貝 ②カキ貝 ③シジミ貝 ④巻き貝

加賀市河南町の凝灰質砂岩泥岩互層(1800万～1600万年位前)からは、巻き貝の一種、ピカリアやカニの化石が見ついています。このことから1800万年前の河南町は亜熱帯のマングロブなどが生息する淡水と海水が混在した汽水の湿地だったことが分かります。

7 当地では、農家の「オエの間」の天井裏を()と呼んだ。

- ①デイ ②アマ ③ツシ ④ニワ

家の間取りは、間口4～5間、奥行き9～11間くらいの長方形が基本でした。外玄関があり、「ニワ」とよばれる土間の作業場があり、その横に下流し・馬屋・便所・風呂などが付属していました。「オエ」とよばれる広い居間があって、いろり・食器棚・焚き物箱などがありました。オエの天井裏は「ツシ」と呼ばれた物置として使われました。

8 当地方の方言で「がさる」とは、主に（ ）という意味で使われていた。

- ①かさばる ②うるさい ③ふざける ④大声をだす

当地では、主に子どもたちがふざけることを「がさる」と言いました。ふざけるを「がさる」という言い方は、紀州弁にもあります。また、全国的には、「ちょける」「ちばける」「おだつ」「いちびる」など、さまざまな言い方が残っています。「がさつとらんと、はよ勉強せいま！」と子どもに注意したお年寄りも多いのでは。

9 縄文時代早期の橋立大野山遺跡からは、尖底（ ）と呼ばれる県内最古の土器が出土している。

- ①火焰型土器 ②楕円押型文土器 ③深鉢捺糸文土器 ④円筒沈線文土器

縄文時代早期の生活は、旧石器時代同様にあまり明らかにされておらず、市内でも橋立大野山・伊切・美岬千崎海岸・柴山水底貝塚等の遺跡があるにすぎない。そのうち大野山遺跡から発見された1個の楕円押型文土器は、近畿地方の影響が強い縄文早期の資料として貴重である。

10 弥生時代前期末の柴山瀉周辺の遺跡からは、北陸で最も古い靱や県内最古の弥生土器が発見された。この（ ）式土器は、東北地方の影響が強く、縄文時代晩期の様式を残している。

- ①柴山水底 ②柴山本村 ③柴山出村 ④片山津

柴山出村遺跡から出土した柴山出村式土器には粗製品と精製品の2種類があり、粗製品は東海地方との関連が強いとされているが、精製品は岩手県大船渡市の大洞A式に類似しており、弥生式土器というものの東日本縄文晩期の遺風を強く残してものである。

11 黒瀬・南郷古墳群のうち、吸坂丸山支群の5号墳からは、鉄製甲をはじめ、（ ）土製品や金製の耳環など、貴重な副葬品が出土している。

- ①三角柱状 ②鶏形 ③巻貝形 ④分銅形

黒瀬・南郷古墳群には約85基の古墳が密集している。その吸坂丸山支群の5号墳からは、鉄製甲をはじめ、鶏形土製品や金製の耳環など、貴重な副葬品が出土している。この古墳群には全長60mの市内最大の前方後方墳や全長70mを超える市内最大の前方後円墳など、大聖寺川水系を支配した、江沼郡全体の首長であったと考えられる豪族の墳墓が築かれている。

12 法皇山横穴群に近い宇谷丸山にも横穴群があり、この地域に形成された（ ）を掘った横穴13基が確認されている。

- ①安山岩 ②泥岩 ③凝灰岩 ④緑色岩

丸山横穴群は昭和32・33年に調査され、凝灰岩を掘って築いた横穴13基が確認された。横穴の規模や構造等は法皇山横穴群と大差はないが、法皇山より少し遅れて築造が開始され、ほぼ同時期に終了したとみられる。

13 弘仁14年(823)に加賀国が越前国より独立し、江沼郡の北半分が能美郡として分立した。承平年間(931~38)に編纂された『和名類聚抄』によると、新しい江沼郡には8郷、あるいは同本の異本によれば（ ）を加えた9郷が置かれたという。

- ①郡家郷 ②長江郷 ③山背郷 ④三枝郷

『和名類聚抄』高山寺本等の写本では、長江・忌浪・山背・竹原・額田・菅浪・八田・三枝の8郷とするが、同本の大東急記念文庫本や那波道円刊古活字版本では8郷に郡家郷を加えて9郷とする。

14 正倉院文書のなかの「越前国江沼郡山背郷計帳」には、江沼臣族の家族構成を記載し

た部分があり、そこには後に女孀として貴族の位を得た（ ）の名が見える。

- ①江沼臣刀良女 ②江沼臣族背田女 ③江沼臣麻蘇比女 ④江沼臣族糠女

天平12年(740)の「越前国江沼郡山背郷計帳」の断簡は、江沼臣族乎加非を戸主とする郷戸1戸分38人と、郷長の江沼臣族忍人の郷戸18人の合計56人分の名が残る断片にすぎないが、その中には、38年後の宝亀9年(778)に宮中の女孀として外従五位下に昇叙した江沼臣麻蘇比女(兵士江沼臣族人麻呂の次女)の名が見える。

- 15 文永10年(1273)、熊坂庄の地頭職を領有した大見実泰は、この庄の当時の領家であった（ ）家の預所と争い、土地の半分を自分の領地としてしまった。

- ①徳大寺 ②西園寺 ③東福寺 ④勸修寺

熊坂庄は、安元2年(1176)の八条院領目録に「庁分御庄」として初見後、春華門昇子、宜秋門院藤原任子、九条道家、九条禅尼(藤原恩子)、宣仁門院藤原彦子と相続されたが、領家は九条禅尼が熊坂庄と共に家地の法性寺田中殿を相続した段階で、徳大寺公継、その孫の実基へ継承されたと思われる。しかし、文永10年の直後、領家分は幕府の支配となり、弘安3年(1280)に北条時宗によって九条家ゆかりの東福寺に寄進された。

- 16 15世紀以降、京都の公家の中には、荘園領主の權益を守るために下国し、家領の直接経営に当たる者も出た。額田荘・八田荘では（ ）の流れをくむ中院家が父子3代にわたり在住して直務を行った。

- ①桓武平氏 ②清和源氏 ③藤原摂関家 ④村上源氏

額田荘は、「承久の乱」までは院領であったが、実質的な支配権は領家一預所の手中にあった。荘務は院の有力近臣高階一門が知行し、その所縁で藤原範子・兼子姉妹を経て、村上源氏の流れをくむ源(中院)通方に譲られ、中世全般を通して中院家領となった。

- 17 時宗最盛期の応永21年(1414)、遊行上人（ ）が潮津で法要を開いた時、篠原合戦で討ち死にした斎藤実盛の霊があらわれ、この怨霊を懇ろに供養したという。

- ①呑海 ②自空 ③尊明 ④太空

斎藤実盛は、『時衆過去帳』に14世遊行上人太空の時に往生したとして「真阿弥陀仏〔斎藤実盛〕」と書かれている。時衆は、『太平記』などに従軍の陣僧として多く見られ、死者の鎮魂にあたっているが、実盛鎮魂もそうした時衆の活動の一端を示すものであろう。

- 18 富墓庄の庄務は、鎌倉時代から菅原道真の後裔の高辻家が知行していたが、応永30年(1423)に將軍（ ）によって、その一部が北野天満宮に寄進された。

- ①足利義満 ②足利義持 ③足利義教 ④足利義政

富墓庄の庄務は、建保6年(1218)の官符によって高辻家の知行が確認されており、その後、寛元4年(1246)の為長置文によって、嫡流系と庶流系に庄務が分割された。応永30年に將軍義持が北野天満宮に寄進したのは、その庶流系分のみであり、永享4年(1432)庶流系が断絶すると、嫡流系が寄進分を回復しようと北野宮寺と相論を展開することになる。

- 19 文明3年(1471)、近江を転々としていた蓮如は吉崎に拠点を立てて以降、三門徒派・高田派を（ ）と非難して退け、その派の諸寺や門徒を本願寺派への吸収を図った。

- ①土蔵法門 ②秘事法門 ③くらがり法門 ④隠し念仏

秘事法門とは、秘密に伝授する教義(法門)のことで、真宗では親鸞が義絶した息子善鸞の法統を引くものを指す。吉崎に入った蓮如は白山天台宗寺院との妥協を説きながら、三門徒派・高田派を秘事法門と非難した。しかし、三門徒派の開祖如道の教えには秘事法門の要素はない。ただ、その子如浄や孫良金が浄土宗へ傾倒しつつあることを非難したと考えられる。

20 享禄4年(1531)、山田光教寺の2世頭誓は、黒瀬覚道などの有力国人と共に、朝倉の援軍を得て、本願寺と連繫する()一党と戦ったが、敗れて越前に亡命した。

- ①本覚寺 ②松岡寺 ③本泉寺 ④超勝寺

本願寺10世証如の時代になると、門徒は直接本願寺の直参門徒になる志望を強めていった。そうした門徒の動向を察した本願寺は、越前帰還を望み三ヶ寺と対抗関係にあった超勝寺との連携を深め、反三ヶ寺体制の姿勢を示すようになった。これに対し三ヶ寺派は実力行動で超勝寺を討つことを決意したが、超勝寺一党が攻撃に出て松岡寺を滅ぼし、本泉寺を焼き払い、江沼郡にも攻め込んだ。この「享禄の錯乱」により、「加州三ヶ寺体制」は消滅し、名実ともに本願寺直参を中心とする本願寺王国が出現した。

21 山口玄蕃宗永は、山城国(京都府)の出身で、慶長3年(1598)4月に越前北庄城主()の家老として大聖寺城主となり、江沼郡7万石を支配した。

- ①堀秀政 ②丹羽長秀 ③小早川秀秋 ④柴田勝家

筑前・筑後(福岡県)の領主であった小早川秀秋は、慶長3年(1598)4月に豊臣秀吉の命により越前北庄に移され、江沼郡も領しました。このとき、秀秋の筆頭家老であった山口玄蕃宗永は、秀吉の直臣に転じて大聖寺城主となり、江沼郡7万石を支配しました。宗永は山城国(京都府)の出身で、筑前・筑後の検地を実施するなど、理財の道に優れた人物でした。

22 初代大聖寺城代(のち郡奉行)の太田長知は、慶長7年(1602)5月に加賀藩主2代前田利長の命で()によって金沢城内で斬殺された。

- ①津田重久 ②横山長知 ③小塚権太夫 ④近藤長広

加賀藩は、慶長5年(1600)8月の大聖寺合戦後から寛永16年(1639)6月の大聖寺藩の成立まで、大聖寺城代(のち郡奉行)を置き江沼郡を支配しました。大聖寺城代は、元和2年(1616)まで太田長知・小塚権太夫・横山長知・近藤長広・津田重久などが派遣されました。初代城代の太田長知は、慶長7年(1602)5月に利長の命で横山長知によって金沢城で斬殺されました。

23 大聖寺藩の家臣数は、藩祖利治治世の寛永16年(1639)には()、2代利明治世の延宝2年(1674)には219人、11代利平治世の天保15年(1844)には278人と増加した。

- ①106人 ②127人 ③153人 ④171人

大聖寺藩の家臣数は、藩祖利治治世の寛永16年(1639)には106人、2代利明治世の延宝2年(1674)には219人でした。11代利平治世の天保15年(1844)には278人と増加しましたが、その後は明治までほとんど変動しませんでした。藩祖利治は承応2年(1653)に藩の財政不足のため、筆頭家老の玉井市正貞直をはじめ、家臣24人を加賀藩へ返還しました。

24 万治3年(1660)、大聖寺藩祖前田利治が江戸で死去したことに伴い、中沢久兵衛、小沢三郎兵衛、小栗権三郎の3人が殉死し、このうち中沢は()で自害した。

- ①宗英寺 ②久法寺 ③全昌寺 ④寛慶寺

大聖寺藩祖前田利治は、万治3年(1660)4月21日に江戸で死去しました。このとき、中沢久兵衛(35歳)、小沢三郎兵衛(49歳)、小栗権三郎(22歳)の3人が殉死(追腹)しました。小沢は4月27日に信州(長野県)善光寺に隣接する寛慶寺で、中沢は5月3日に全昌寺で、小栗は5月2日に久法寺で自害しました。彼らの墓は、いまでも実性院にある利治の墓の後方に立てられています。

25 大聖寺新田藩祖前田利昌は、宝永6年(1709)2月に上野寛永寺で行われた5代將軍徳川綱吉の法会において、御馳走役を務めた大和()の織田秀親(監物)を殺害した。

- ①柳本藩主やなぎもとほんしゅ ②蒲生藩主がもうはんしゅ ③郡山藩主こおりやまはんしゅ ④柳生藩主やぎゅうはんしゅ

大聖寺新田藩祖前田利昌（3代利直の弟）は、宝永6年（1709）2月に上野寛永寺で行われた5代将軍徳川綱吉の法会において、他藩の4人とともに朝廷の使者をもてなす御馳走役を命じられました。ところが、利昌はこの法会が行われた2月16日に乱心し、同寺の顕性院で大和柳本藩主の織田秀親（監物）を殺害しました。利昌は同月18日に切腹となり、大聖寺新田藩も廃藩となりました。

- 26 柴山しばやま湯周たしゅう辺へんにも、大聖寺川おほせいじがわと同様に川舟かわふねの河道こうど（船着場ふなつきば）が置かれており、遊行上人ゆぎょうしやうにん一行は、（ ）村領しやうにんこうどにあった上人河道さねもりづかを利用して実盛塚えこうを回向した。

- ①柴山しばやま ②新保しんぼ ③伊切いきり ④篠原しのはら

遊行上人一行100人余は、前年の10月下旬に金沢玉泉寺に入り、そこで翌年2月まで約100日間逗留したのち、金沢を出立して小松で宿泊しました。上人一行は翌日午前中に小松の多太八幡宮を参詣し、午後には篠原の実盛塚に移動して弥陀経の念仏を唱えました。このとき、上人一行は今江村から数艘の舟に乗り、大聖寺藩士が待つ伊切村領の上人河道で舟を降りました。

- 27 4代前田利章まえだとしあきら治世ちせいに起こった正徳一揆しょうとくいでは、農民たちは作柄さくがらの検分けんぶんを行っていた藩の役人らを（ ）村しゅうげきで襲撃ねんぐし、年貢ねんぐの軽減けいげんを認めさせた。

- ①分校ぶんぎょう ②山代やましろ ③串茶屋くしちや ④那谷なた

大聖寺藩主4代前田利章の治世、正徳2年（1712）8月には強風被害に伴い、領内全域にわたる正徳一揆が起こりました。このとき、農民たちは作柄の検分を行っていた役人らを那谷村で襲撃し、年貢の軽減を認めさせました。農民たちは串茶屋・庄・山代・山中などの問屋や十村宅を襲い、打ちこわしを行いました。農民たちは自村の焼打ちを恐れて、仕方なく一揆に参加しました。

- 28 大聖寺藩の村々には、村肝煎むらきもいり・（ ）ひやくしやうだい・百姓代むらかたさんやくからなる村方三役じかたさんやく（地方三役）が置かれており、村肝煎は頭振あたまふり（水呑百姓みずのみびやくしやう）を除く村人から入札にゅうさつ（選挙せんきよ）で選ばれた。

- ①組合頭くみあいがしら ②十人頭じゅうにんがしら ③五人頭ごにんがしら ④十村頭とむらがしら

大聖寺藩の村々にも、村肝煎・組合頭・百姓代から成る村方三役（地方三役）が置かれていました。村肝煎は頭振（水呑百姓）を除く村人から入札（選挙）で選ばれ、一定の役料が支給された。組合頭は村肝煎の補佐役で、村万雑（雑費）から若干の役料が支給されました。百姓代は臨時の連名者で、役所への報告に形式的に名前を連ねました。

- 29 大聖寺藩では、城下町じやうかまちの西端にしはしに関所せきしよ（加賀藩が慶長15年頃に設置）を、橋たちばな・吉崎よしざき・熊坂くま・（ ）さか村などに口留番所くちどめばんしよを置き、越前との往来おうらいを常に監視つねにかんしした。

- ①山中やまなか ②風谷かぜたに ③九谷くたに ④真砂まなご

大聖寺では城下町の西端に関所を、橋・吉崎・熊坂・風谷・大内などに口留番所を置き、越前との往来を常に監視しました。大聖寺の関所は日の出とともに門扉を開き、日没とともにそれを閉じ、夜間の通行は禁止していました。足軽数人が当番と非番に分かれ、昼夜ともに門番に当たっていました。なお、関所の柵門は明治2年（1869）に宗寿寺の境内に移され山門となりました。

- 30 明治初年（1868）、大聖寺藩で預かっていた浦上うらかみキリシタンたちは、その後、金沢の（ ）ようじやうじよに建てられた養生所ようじやうじよに送られた。

- ①尾山神社おやまじんじや ②卯辰山うたつやま ③大乘寺だいじやうじ ④野田山のだやま

明治初年、大聖寺藩は50人の浦上切支丹を預り、大聖寺庄兵衛谷の長屋に収容しました。藩ではキリシタンたちの改宗を迫るため、藩内の各真宗寺院に説諭を命じました。最終的に50人のうち、5人が病死し、残り45人のうち、改心した者は18人であったと記録されています。この浦上キリシタンたちは、明治5年7月に金沢卯辰山の養生所に送られました。

31 大聖寺藩士飛鳥井清は、鉛筆製造を行なう際、ウィーン万国博覧会で鉛筆製造の技術を学んできた（ ）の指導を得た。

- ①藤山種広 ②井口直樹 ③小池卯三郎 ④真崎仁六

明治 8 年 (1875) に富士写ヶ岳山麓の片谷村で良質の黒鉛が発見されました。この黒鉛を利用して鉛筆製造をしようと考えたのが、旧大聖寺藩士の飛鳥井清でした。彼は、ウィーン万国博覧会 (明治 6 年オーストリアで開催) で鉛筆製造の技術を学んできた井口直樹の指導を得て、鉛筆製造を始めました。二人の出会いは、飛鳥井清が当時、大蔵省で勤務していたためと云われています。

32 明治期、江沼郡の九谷焼業界は、江戸期の染錦伊万里の写しを大量に生産した。これらの焼き物は仕上がりが大変よく、（ ）伊万里と呼ばれて人気があった。

- ①山代 ②大聖寺 ③九谷 ④江沼

江沼郡の九谷焼業界では、海外の需要に基づき江戸時代の染錦伊万里の写しを大量に生産しました。これらの焼物は、「大聖寺伊万里」と呼ばれて、仕上がりが大変良く、本歌を超える焼き物として人気がありました。大聖寺伊万里は江沼郡における九谷焼業界の隆盛を築くもととなりました。

33 昭和 7 年 (1932)、大聖寺商工会館の完成を記念して、大聖寺（ ）が開催された。

- ①物産展 ②博覧会 ③古九谷展 ④十万石文化展

昭和 7 年 (1932)、大聖寺商工会館の完成を記念して「大聖寺十万石文化展」が、同館を第 1 会場に、大聖寺小学校 (現錦城小学校) を第 2 会場にして開催されました。会場には織物や陶器、漆器、古美術、児童の卒業記念作品など、数多くの資料が展示され、大聖寺駅前通りには約 50 基におよぶ 広告塔や 2 基の大アーチが取り付けられ、町全体で文化展の開催を盛り上げました。

34 江沼郡では、明治初年、錦城小学校をはじめ 21 の小学校が設立された。このうち、「玄笠小学校」と称していた学校は、（ ）町に在った。

- ①七日市 ②西島 ③庄 ④加茂

江沼郡では明治 5 年から 6 年頃にかけて、錦城・京達・有隣・旗陽の大聖寺 4 校をはじめ、塩浦 (塩屋)、竹浦 (瀬越)、三木、対溪 (長谷田)、山中、脩来 (塔尾)、開陽 (山代)、勅使、那谷、打越、動橋、玄笠 (七日市)、賀、尚禮 (片山津)、北浜 (橋立)、得知 (篠原)、柴山などの 21 の小学校が設立されました。

35 昭和 33 年 1 月 (1958)、山中町を除く 9 ヶ町村が合併し、(旧) 加賀市が発足した。翌 34 年には市制発足祝賀会が（ ）にて盛大に開かれた。

- ①錦城小学校 ②大聖寺商工会館 ③旧大聖寺町役場 ④市役所新庁舎

昭和 33 年 (1958) 1 月に、山中町を除く 9 町村の合併により「加賀市」が誕生しました。加賀市は石川県で 6 番目の市制成立となりました。翌 34 年 6 月 3 日、錦城小学校の講堂で市制発足祝賀会が盛大に開催されました。なお、市役所新庁舎はさらに翌年の、昭和 35 年 6 月に完成しました。

36 大聖寺出身の海軍大將瓜生外吉の夫人は、明治 4 年 (1871) に岩倉使節団として渡米した日本初の女子留学生 5 名の一人、（ ）である。

- ①津田梅子 ②吉益亮子 ③永井繁子 ④山川捨松

明治政府は、岩倉具視を代表とする欧米視察団の中に、6 歳の津田梅子をはじめ 5 人の少女を随行させました。この 5 人の中に当時 9 歳の永井繁子もいました。繁子は、留学当時、ちょうどアナポリスで海軍学校に留学中の瓜生外吉と知り合い、このことがきっかけとなり、その後、二人は結婚しました。繁子は、日本に帰国してから、東京音楽学校でピアノを教えるなど、日本における洋楽の普及と教育に貢献した人として知られています。

37 江沼郡出身の天台宗の僧延昌の事蹟をもとに創作された謡曲「敷地物狂」の作者は（ ）だと考えられている。

- ①観阿弥 ②世阿弥 ③観世元雅 ④金春禅竹

天台座主延昌の伝承は、天台宗延暦寺を中心に様々な僧伝が脚色されてきたが、室町中期の『三国伝記』に至ってほぼ完成をみた。そこに書かれた話をもとに創作された「敷地物狂」の作者については、室町中期の作者付『自家伝抄』は、金春禅竹としている。

38 齋藤実盛は、越前から武蔵国長井に移り住み、当初は（ ）に仕えていたが、平治の乱の後には関東の有力武将として平宗盛に仕えて活躍した。

- ①源頼政 ② 源義家 ③ 源義朝 ④ 源為義

齋藤実盛の出生地には、鯖江市南井、坂井市丸岡町長畝、敦賀市縄間、加賀市永井町等、諸説があるが、武蔵国幡羅郡長井庄に移り、源義朝に仕えた。久寿2年(1155)義朝が息子義平に命じて、弟義賢を滅ぼした大蔵合戦の折、義賢の遺児・駒王丸を畠山重能より預かり、乳父である信濃国の中原兼遠のもとに逃がしたという。

39 浄土真宗本願寺派第8代法主蓮如は、永享3年(1431)天台宗門跡寺院（ ）で得度した。

- ①曼殊院 ② 三千院 ③ 青蓮院 ④ 妙法院

本願寺は、親鸞が青蓮院門跡慈円の下で出家した縁もあって、文永9年(1272)大谷廟堂建立、元亨元年(1321)本願寺寺院化以降も、延暦寺の支配を受け続け、蓮如が延暦寺への分担金支払いを拒否して、本願寺を破却されるまで、青蓮院の末寺のような状態に置かれていた。

40 江沼郡（ ）を拠点とする一向一揆の大將であった藤丸新介は、天文24年(1555)朝倉宗滴が江沼郡に侵入した時、南郷城で迎え撃ったが敗退した。

- ①横北 ② 赤尾 ③ 黒瀬 ④ 福田

藤丸新介は、江沼郡赤尾を拠点とする一向一揆の大將で、天文24年(1555)朝倉宗滴が江沼郡に侵攻した時、南郷城に黒瀬掃部丞とともに迎え撃ったが敗退。その後、赤尾を捨てて横北に逃れたと伝えられているが、天正5年(1577)越後の上杉景勝に仕え、魚津城の守備についたが、同10年柴田勝家に攻められて自刃したという。

41 溝口秀勝は、天正12年(1584)丹羽長秀の与力として、大聖寺城主4万4000石を与えられたが、翌年、長秀の死後により（ ）の与力となり、引き続き配属された。

- ① 柴田勝家 ② 羽柴秀吉 ③ 堀秀政 ④ 青木一矩

溝口秀勝は幼児期より丹羽長秀に仕え、天正9年(1581)織田信長に才能を認められて若狭高浜城5000石を与えられた。その後、賤ヶ岳の戦いにより羽柴秀吉の命で丹羽長秀に若狭・越前・加賀2郡を与えられると、その与力として秀勝は江沼郡大聖寺城を与えられた。長秀の死後、越前北庄に入った堀秀政の与力として引き続いて配属され、慶長3年(1598)その子秀治の越後春日山移封に伴い、新発田に移るまで、15年間大聖寺に在城した。

42 飛鳥井清は、明治8年(1876)に江沼郡西谷村（ ）の黒鉛を利用し、柿沢理平を職工長とした会社「加州松島社」を設立して鉛筆製造を始めた。

- ① 生水 ② 片谷 ③ 我谷 ④ 枯淵

飛鳥井清は、明治8年(1876)に江沼郡西谷村片谷の黒鉛を利用し、柿沢理平を職工長とした会社「加州松島社」を設立して鉛筆製造を始めました。また、同12年には「九谷陶器会社」を設立し、九谷焼の振興を図りました。このほか、山中漆器や高岡銅器の製造振興などを図り、維新後の郷土の産業発展に多大な貢献をしました。

43 渡辺卯三郎は、明治13年(1880)10月の金沢病院大聖寺分院（のち江沼病院）の開設に際し、その院長職を（ ）に譲り顧問となった。

- ① 竹内玄同 ② 馬嶋謙吉 ③ 稲坂謙吉 ④ 黒川良安

大聖寺藩士の渡辺卯三郎は初め金沢の黒川良安に、また丸岡藩医の橋本文範に蘭学を学び、さらに大坂の緒方洪庵の適々齋塾（適塾）に入門し、その7代塾頭を務めました。卯三郎は、師洪庵に願い出て約1年間長崎に留学しました。その後、卯三郎は明治13年（1880）10月の金沢病院大聖寺出張所（のち江沼病院）の開設に際し、その院長職を稲坂謙吉に譲り顧問となりました。

- 44 物理学者の中谷宇吉郎は、大正14年（1925）に理化学研究所で（ ）の研究室員となり、昭和11年（1936）には世界ではじめて人工雪の製作に成功した。

①長岡半太郎 ②野口英世 ③高峰譲吉 ④寺田寅彦

物理学者の中谷宇吉郎は、大正14年（1925）に理化学研究所で寺田寅彦の研究室員となり、昭和8年（1933）には北海道帝国大学教授となって「雪の結晶」の研究に取り組み、同11年に世界ではじめて人工雪の製作に成功しました。著作には『冬の華』『雪』などがあり、「雪は天から送られた手紙である」という宇吉郎の言葉はよく知られています。

- 45 陸軍大佐の辻政信は、昭和25年（1950）に戦犯容疑を受けて身を隠していたときの体験を書いた（ ）を週刊誌『サンデー毎日』に連載した。

①動乱の眼 ②潜行三千里 ③日本と世界 ④亜細亜の共感

陸軍大佐の辻政信は、昭和25年（1950）に戦犯容疑を受けて身を隠していたときの体験を書いた「潜行三千里」を週刊誌『サンデー毎日』に連載しました。その後、衆議院議員4期と参議院議員1期をと務め務めました。同36年の参議院議員在任中に東南アジア視察のため出国し、ラオス国で行方不明となりました。

- 46 片山津町の西側台地では、管玉や勾玉などを製造していた住居と工房を兼ねた穴式住居跡（ ）基が発見され、古墳時代の専門的玉造工人集団の集落と推定されている。

① 1 3 ② 2 3 ③ 3 3 ④ 4 3

片山津玉造遺跡は、4世紀後半～5世紀前半の古墳時代の市指定文化財史跡で、昭和34・35年（1959・60）の発掘調査により碧玉や緑色凝灰岩の頁岩を用いた玉類を製造していた専門的玉造工人集団の縦穴式住居跡33基が発見された。

- 47 鹿島は大聖寺川河口の陸続きの小島で、古くは天台宗の霊場が、江戸時代には（ ）と称する法華宗の道場があったため、鹿島の森は数百年来、斧を入れることはなかった。

①慈光院 ②萬宝院 ③宗寿院 ④慈妙院

鹿島は大聖寺川河口、塩屋町に位置する陸続きの小島で、古くは天台宗の霊場が、また江戸時代大聖寺藩初代藩主前田利治が萬宝院と称する法華宗の道場として使ったため、鹿島の森（社叢）は数百年来、斧を入れたことないと伝わっている。

- 48 菅生石部神社では、毎年7月24日から26日にかけて行われる天神講が行なわれ、この日は氏子の少年たちにより、（ ）の舞・鈴の舞・蝶の舞の3種の稚児舞が奉納される。

①水 ②扇 ③松 ④火

大聖寺敷地の菅生石部神社の天神講では、例年、氏子の少年たちにより「蝶の舞」が奉納されます。この舞は「扇の舞」「鈴の舞」「蝶の舞」の三種を総称したもので、かなり古い時代から奉納されてきたと推定される稚児舞で、現在、加賀地方に残る唯一の稚児舞として貴重な民俗芸能となっています。

- 49 山中温泉菅谷町の（ ）境内に立つ幹周7.3mの大スギは、地上3mのところ

で3つに幹が別れていたため、別名「三叉大スギ」と呼ばれる。

- ① 菅原神社 ② 白山神社 ③ 八幡神社 ④ 菅谷神社

菅谷町河の八幡神社境内にある幹周7.3m、高さ54mの大スギは、樹齢2300年と伝えられているが定かではない。地上3mのところまで3つの幹に別れており、別名「三叉大スギ」とも呼ばれる。その樹姿には、昔大スギは単幹であったため、村人が伐採して船の帆柱用に高く売ろうとしたところ、翌日、神社へ行ってみると大スギは三叉になっており帆柱にならなかったという伝説がある。

- 50 加賀市が所蔵する白山麓の山村生産用具2638点と、()で使われていた山村民家1棟が、国の有形民俗文化財に指定されている。

- ① 旧白峰村桑島 ② 旧西尾村西俣 ③ 旧白峰村白峰 ④ 旧新丸村新保

白山麓の山村生産用具と民家は、加賀市分校町に在住していた伊藤常次郎氏(故人)が、生涯をかけて収集したもので、現在、大日川ダム建設のため水没した旧新丸村新保にあった山村民家は、加賀市中央公園の歴史民俗広場に移築公開されており、また膨大な民具は同広場の民俗文化財収蔵庫に保管されている。

- 51 塩屋町を中心に伝わる「シャシャムシャ踊り」は、笛や太鼓の囃子もなく、仏の信心を歌った歌声だけの素朴な盆踊りで、別名()とも言われている。

- ① 念仏踊り ② 蓮如踊り ③ 法然踊り ④ 一向踊り

塩屋町を中心として、近くの吉崎町・永井町に古くから伝えられている民俗芸能で、旧盆の8月15・16日に行われ、やぐらを使わず、笛・太鼓もなく、日本海の波の音を伴奏とする素朴な盆踊り。一説に蓮如上人から教えられたとも伝えられ、別名蓮如踊りとも称される。

- 52 大聖寺町の西端にある錦城山(標高約65m)には、南北朝時代の()を史料的な初見とする大聖寺城が置かれていた。

- ① 源平盛衰記 ② 愚管抄 ③ 神皇正統記 ④ 太平記

大聖寺西端の錦城山には、南北朝時代から元和元年(1615)まで数度に亘って大聖寺城(津葉城を含む)が設置されてきました。大聖寺城が歴史に登場するのは、南北朝時代の『太平記』が初見です。その後、一向一揆勢の土豪、織田信長の家臣、羽柴秀吉の陪臣・溝口秀勝、小早川秀秋の家老・山口宗永、加賀藩主2代前田利長の家臣(大聖寺城代)などの武将が統治しました。

- 53 大聖寺下屋敷の「山の下寺院群」には、実性院・蓮光寺・久法寺・全昌寺・正覚寺・宗寿寺・本光寺や神明宮があり、このうち、宗寿寺は()の寺院である。

- ① 法華宗 ② 曹洞宗 ③ 日蓮宗 ④ 浄土宗

大聖寺下屋敷から神明町までの一帯は、「山の下寺院群」と呼ばれ、実性院(曹洞宗)・蓮光寺(日蓮宗)・久法寺(法華宗)・全昌寺(曹洞宗)・正覚寺(浄土宗)・宗寿寺(日蓮宗)・本光寺(法華宗)の7寺院と神明宮の1神社が並んでいます。これは藩政初期に大聖寺藩が越前との国境付近に、意図的に寺社を集めたものといわれています。

- 54 大聖寺藩では、片野鴨池の周辺で鴨や雁などを捕る坂網猟が行われ、『大聖寺藩史』には、江戸後期、坂網を投げ上げる「坂場」が()ヶ所余あったとの記録がある。

- ① 390 ② 470 ③ 670 ④ 780

大聖寺藩には、江戸後期に坂網猟の坂網を投げ上げる「坂場」が670ヶ所余もあったことが『大聖寺藩史』に記載されています。なお、この坂場を「坂」と「場」(構え場)に区分けすると、「坂」(坂場)は130ヶ所から160ヶ所程度で「場」(構え場)の数が670ヶ所程度となります。

- 55 菅生石部神社の境内には、文政8年(1825)に()の名工山上善右衛門嘉広の系統にあたる7代目善右衛門吉順が建立した楼門(神門)がある。

- ① 四天王寺流 してんのうじりゅう ② 遠州流 えんしゅうりゅう ③ 大都流 だいてりゅう ④ 建仁寺流 けんにんじりゅう

菅生石部神社の境内入り口には、三間一戸の定型的な楼門（神門）があります。これは文政8年（1825）に建仁寺流の名工山上善衛門嘉広の系統にあたる7代目善衛門吉順が設計したものであり、大聖寺藩主をはじめ有力町人らの寄進により、大聖寺・加賀両藩の大工棟梁を動員して建立されました。屋根はもと棧瓦葺きでしたが、昭和5年の修理で銅板葺きとなりました。

- 56 大聖寺城主山口宗永の菩提寺で知られる大聖寺神明町の全昌寺には、慶応3年（1867）から明治初年にかけて製作した（ ）の五百羅漢などがすべて残されている。

- ① 517体 ② 537体 ③ 557体 ④ 577体

大聖寺城主山口宗永の菩提寺で知られる大聖寺神明町の全昌寺（曹洞宗）には、慶応3年（1867）から明治初年にかけて製作した517体の五百羅漢像（木像）などがすべて残されています。これらは釈迦三尊像3体、十大弟子尊像10体、四天王尊像4体、五百羅漢尊像500体の計517体が、色彩豊かに保存されており、製作記録と寄進者を記録した台帳も現存します。

- 57 山中温泉医王寺所蔵の「山中温泉縁起絵巻」には、奈良時代の大僧正行基が温泉を発見したことや、鎌倉時代に（ ）の御家人長谷部信連が温泉を再興したことを記している。

- ① 加賀国 ② 能登国 ③ 越前国 ④ 越中国

山中温泉医王寺所蔵の「山中温泉縁起絵巻」は、鎌倉時代の建久年間（1190～99）に作成されましたが、寛政10年（1789）に焼失し、文化9年（1812）に改めて作成されたといわれています。奈良時代の大僧正行基による温泉の発見を書きだしに、承平年間（931～38）に温泉が埋まって荒廃しましたが、鎌倉時代に能登国の御家人長谷部信連の手で再興されたことが明記されています。

- 58 山中漆器の生産額のピークは昭和63年（1988）で、この時期、生産額は約400億円、事業所数はおよそ（ ）ヶ所に達していた。

- ① 700 ② 820 ③ 890 ④ 920

山中漆器の生産額のピークは63年で、この頃、生産額は400億円、事業所数はおよそ700ヶ所、従業員数も5千人に達していました。しかしながら、景気の低迷や国外からの安い漆器が輸入されるようになり平成30年度においては、生産額が約86億円、事業所数が280ヶ所、生産に従事する人たちの数も1,300人まで減少しています。

- 59 現在の片山津温泉総湯は、平成24年（2012）に世界的な建築家（ ）が設計したもので、全面ガラス張りで美しい柴山湯を眺めることができる。

- ① 磯崎新 ② 谷口吉生 ③ 安藤忠雄 ④ 隈研吾

平成6年（1994）には、世界的な建築家磯崎新氏による「中谷宇吉郎雪の科学館」が建設され、年間2万人（同25年度実績）の親子連れや観光客で賑わっています。また老朽化した総湯の建て替えをきっかけとして、世界的な建築家谷口吉郎氏の設計・監修による新総湯（共浴場）が同24年4月に建設され、片山津温泉の湯浴いに賑わいを取り戻しつつあります。

- 60 明治13年（1880）、大聖寺商法会議所が設立され、初代会頭に（ ）が就任した。

- ① 梅田五月 ② 飛鳥井清 ③ 石川嶂 ④ 新家熊吉

昭和初年、大聖寺で発刊されていた新聞「聖城公論」によれば、明治13年（1880）「大聖寺商法会議所」が設立され、初代会頭に石川嶂が就き、前田幹、河崎時、梅田五月、山田長三郎、飛鳥井清清水惣八など大聖寺を中心とした実業家たち100名が議員となっていたことが記載されています。